

日本庭園学会ニュース

The Academic Society of Japanese Garden News

NO. 79
平成26年

予告 平成26年度 日本庭園学会関西大会

発行 日本庭園学会(会長 鈴木久男)
〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1-1-1
東京農業大学 地域環境学部 造園科学科
ガーデンデザイン研究室
TEL(03)-5477-2430(鈴木誠研究室)
<http://www.soc.nii.ac.jp/asjg/>

予告 平成26年度 日本庭園学会関西大会

平成26年度の関西大会は、平成26年11月29日(土)・30日(日)の2日間、京都市の京都産業大学(京都市北区上賀茂本山)を会場として開催する。

庭園現地見学会(場所未定)を1日目の午前に、研究発表会は1日目の午後と2日目の午前に、シンポジウムを2日目午後に予定している。シンポジウムは「平安時代庭園の再検討」(仮題)と題し、鈴木久男氏(本学会会長)をコーディネータとして開催する予定である。

平成23年(2011)に京都市中京区で発掘調査された藤原良相(813~867)の邸宅跡では、平安時代前期の園池の全容が良好な状態で確認されるとともに、墨書土器や木簡、檜扇の断片などが検出された。本シンポジウムでは、これら遺物に記された最古級のひらがなを解読された西山良平・京都大学大学院教授に基調講演をお願いし、冷泉院庭園・斎宮邸庭園・藤原良相邸庭園・堀河院庭園などこれまで発掘調査で遺構が確認された平安時代の庭園に関する各庭園遺構の発掘調査担当者からの事例報告を受け、平安時代の庭園をめぐって議論したい。

研究発表会での発表希望者は、下記の要領にしたがって申し込むこと。発表時間は、ひとりあたり25分とし、発表20分、質疑応答5分を予定している(但し、発表者数によって変更する場合がある)。また、発表にはPCプロジェクターの使用が可能である。

■研究発表の申し込み受付について

◆発表申込み、発表要旨提出期限

平成26年10月5日(日)

◆申込み方法

発表者氏名・所属・題名・連絡先を明記し、発表概要(200字程度)を添付のうえ下記の「発表申込先」まで送付すること。原則的にはEメールとするが、郵送もしくはFAXでもかまわない。

◆発表要旨提出期限

平成26年11月16日(日)(本文版下原稿の郵送期限)

※Eメールでの送付の場合は、同日17:00までとする。

◆執筆要領

全発表者分を研究発表要旨集として印刷し、当日参加者に配布する。原稿はそのまま要旨集の版下とする。そのため、ワープロを使用して作成すること。文量は、A4判で2ページもしくは4ページ、6ページとする（奇数ページでの原稿は、受け付けないので注意すること）。

1ページあたりの文字数及びページレイアウトは、学会誌の論文の書式に準じ、横書き2段組、1段あたり25字40行となっている。なお、書式はホームページからダウンロードが可能となっている（研究発表要旨書式：PDF/Microsoft Word）。申し込みと資料提出の締め切り日は厳守のこと。

◆発表の申込み先・発表要旨の提出先

〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山2-116

京都造形芸術大学日本庭園・歴史遺産研究センター気付

日本庭園学会関西支部事務局

担当者：関西支部長 仲 隆裕

電話：075-791-9018 F A X：075-791-9127

Eメール：naka@kuad.kyoto-art.ac.jp

日本庭園学会 関西研究会 第5回文化財庭園部会

関西支部では、以下の日程と会場で研究会を開催することになりました。今回は、実務者による文化財庭園の修理の報告が行われます。皆様、ふるってご参加くださいますよう、よろしく願い申し上げます。

■日時

平成26年9月28日（日）13:30-16:00

■会場

京都造形芸術大学歴史遺産学科研究室（人間館A棟4階 エレベータ左向かい）

■住所

京都市左京区北白川瓜生山2-116

■資料代

500円

■スケジュール

13:00 受付開始

13:20 開会挨拶

関西支部長 仲隆裕（京都造形芸術大学）

研究報告

13:30 「京都市登録名勝 都ホテル葵殿庭園の定期修理」 阪上富男（植彌加藤造園株式会社）

14:00 「京都市指定名勝 遺香庵庭園の地割の修理」 吉野裕仁（樋口造園株式会社）

14:30 「京都市指定名勝 西翁院庭園の定期修理」 山田耕三（花豊造園株式会社）

15:00 討議 司会：今江秀史（京都市文化財保護課）

16:00 閉会

レポート

平成 26 年度全国大会 研究発表会 (6/21)

6月末に行われた全国大会。今回は越後・新潟での初開催となった。研究発表会は、新潟市中心部から程近い、大正時代の豪商齋藤家の別邸と明治期に建てられた北方文化博物館新潟分館の2館に分かれて行われた。旧齋藤家別邸では二階から主庭を眺め下ろせる開放的な場所を会場に、北方文化博物館分館では枯山水の庭を背景にした広間を会場にして行われた。どちらも話の合間に緑や清流の水音を楽しめる庭園学会らしい会場であったように思う。私の居た旧齋藤家別邸では、研究内容の違いから、国内の庭園に関する事例、海外の事例、その他の事例と三部構成で行われ、その他の事例では映像記録や『作庭記』を経営実務に応用するなどのユニークな発表もあった。ところで、研究発表会は朝から晩まで庭園を題材にした公衆浴場に一日中浸かることが多いと聞いたが、たまにはこうして庭の景色を楽しめる露天風呂から新たな知識や着想を得る発表会も悪くないかもしれない。

土沼直亮 (新潟市旧齋藤家別邸)

レポート

平成 26 年度全国大会 公開シンポジウム (6/21)

全国大会、第2日目午前の現地見学会では、清水園・石泉荘庭園・伊藤家庭園など小雨の降る中ではあったが、名庭師田中泰阿弥に触れるとても貴重な機会であった。



平成 26 年度全国大会研究会

続いて午後のシンポジウムでは、東京工業大学名誉教授中村良夫先生の基調講演「ニハとしての都市」から始まった。中村先生は、庭の知恵を都市に生かすこと、日本庭園の大事な部分を掴み都市に拡大していく、場の縁(ふち)の諸相、フォルムではなく気配と縁(ふち)の関係について述べた。特に日本の住宅建築の特徴である内側と外側の間の取り方、住居と庭園は分かれているが気配は伝わり、繋がり関係は成立している。これらは、町ニハの取り組みに生かすことができ、場の気配として人と人を繋ぐことができる。さらに庭園の概念にはもっと深いものがあり、これらを都市の縁(ふち)住まいの縁(ふち)として活用できると述べた。次に新潟市都市政策部長池田博俊氏の「日本庭園とまちをつなぐ～行政参加のまちづくり～」では、齋藤邸売却の話の持ち上がり、市民の会立ち上げ、さらに邸宅一般公開に至るまでの経過と取り組みを述べた。町と市民と行政の繋がりを「まちづくりからまちづかいへ」移行し、①視点を変える②価値を変える③物語をつくる。市民が取り組むまちづくり



平成 26 年度全国大会公開シンポジウム

へと転換していった。また、新潟市旧齋藤家別邸館長松山雄二氏の「都市の品格とまちづくり～市民が日本庭園を手にしたことによる市民意識の変化～」では、新潟市は経済発展の遅れと文化的施設が少なく、町おこし、地域活性化の必要性の課題があった。現在、市民参加の良い管理で運営し町の素晴らしさを広げている。今回のシンポジウムで私が感じたことは、新潟市は市民と行政の力により、日本庭園から町を繋げ、その中の気配と縁（ふち）の関係が文化的空間の繋がりを生みだした。住民が使い手でもあり運営側にも立つ、まさにニハとしての都市環境であると思った。

熊倉早苗（植彌加藤造園株式会社）



レポート

平成26年度全国大会 公開シンポジウム (6/22)

新潟市近郊の庭園（新発田市清水園、同石泉荘、新潟市北方文化博物館）

大会2日目の朝、小雨の中、新潟市の市街地から新発田市に向けて出発、昨日の旧齋藤家別邸庭園・旧清水常作別邸に続き同県を代表する庭園3か所を巡る行程で、車中では土沼隆雄さんに各園を解説していただいた。

旧新発田藩主溝口家下屋敷庭園（清水園：新発田市大栄町）清水園は阿賀野川北域の平野部にあたる旧新発田藩城下町に位置している。藩主の下屋敷、清水谷御殿として寛文6年（1666）から元禄6年（1693）にかけて造営され、明治24年（1891）に越後最大の地主伊藤家の所有に帰したのち、昭和21年に北方文化博物館の管理となり清水園として現在公開されている。国指定名勝。若緑に覆われた茅葺の総門をくぐり、砂利敷の小道を進んで中門を抜けて書院の表座敷に上がると、目の前に穏やかに水を湛えた広い園池の水面が現われた。近江八景を意匠に取り入れた庭園は、面積約4,000坪の広大な池泉廻遊式庭園で、元禄年間の築庭後、昭和28年から31年にかけて田中泰阿弥によって修復されて現在の姿になったものである。曲線の美しい池畔には5棟の茶亭が建てられ、周囲は松、杉、タブ、アラカシ、モミジ、孟宗竹など緑の鮮やかな竹木に覆われている。表書院の座敷に座るとその奥行が一望でき、池の最奥には滝石組が遠望できた。

しばらくその広がりを楽しみ、書院を出て池畔に出ると、池中に岩島や小島、大小の岬が現われる。池東部の岬の先端には荒磯風の州浜があらわれ、その先端には丸みをおびた大小海石と石灯籠が配されていて、なかでも印象的な光景であった。さらに進むと低い滝石組に至り、岬間の石橋を渡ると、西岸の翠濤庵ほかの茶室棟前に着いた。茶室の優美もさることながら、周囲の飛び石や茶室周りの雨落ち溝の配石の妙に、参加者の感嘆の声が挙がっていたことが印象に残っている。

旧石崎家庭園（石泉荘：新発田市諏訪町）清水園から徒歩で移動して到着した石泉荘は、明治初期に建立された料亭「花菱」が前身で、製油業を営んだ石崎家の別邸となり、その庭園と建物の一部が現在公開されている。建立当時は、貸座敷群としてにぎわった花街の一角だったそうだが、その面影は、今は周囲には少ない。しかし緑に包まれ静寂な印象の石泉荘は、現在のような住宅街にある方が周囲と馴染んでいるようにも思われた。

「花菱」時代の趣を残す表門から園内に入り、離れ座敷の縁側に座ると、目の前には池ではなく、幅約4mの新発田川の流れが現われた。敷地の中央に川の流れを取り込んだ、独特の発想を得た回遊式庭園で、約1,500坪の広さを有している。国登録記念物。

庭園は、川を挟み渡り廊下で結ばれる離れ座敷と主屋を中心建物としているが、その目前で新発田川の川幅を曲線的に広げて石組み護岸とし、曲線の一部をさらに奥に引き込んで滝石組を配する手法などによって、川を園池のように見せている。滝石組の前には飛石が置かれ、岬や入江には立石が立てられ、川幅が最も広がる座敷前には中島が築かれていて、水が一方に流れていなければ、園池そのものの景である。

座敷を出て園路を進むと、この流れの造形とは別に、複雑な曲線でない平面円形の園池が現れ、別の趣を添えている。川の護岸部では50～150cm大の角のない自然石を縦横に用いて立体的に組んでいるが、この池の護岸は人頭大の丸石を二段組にして起伏を低く抑え、前者とは対照的な意匠としている。

さらに異なるのは、園池状に広げられた新発田川が、渡り廊下の下で元の川幅に収束して屋敷外へ続く部分で、延石を組んだ切石護岸に意匠を変えて外部へと繋がってゆくが、延石護岸と石組み護岸は無理なく連続していて巧みである。とてもユニークで印象深い庭園で

あった。

旧伊藤家庭園（北方文化博物館：新潟市江南区沢海）阿賀野川沿いの広大な田園風景の中に、突如として建つ旧伊藤家は、明治から大正期にかけて約1,300町歩もの広大な農地を集積した有数の大地主伊藤文吉家の旧本宅で、現在は一般財団法人北方文化博物館によって運営公開されている。敷地内には主屋や土蔵門、外観が正三角形の三楽亭など計26棟の国登録の建造物を有し、その空間の随所に造園的な意匠が凝らされているが、最も主要な造形は、迎賓施設である大広間前の大庭で、昭和期に田中泰阿弥によって改修されて現在に至っている。技に材に、贅が尽くされた庭園である。

まず建物内に入ると大広間の広さに驚く。開け放たれた座敷の欄間は柱がない釣欄間で、大広間南面の土縁に座って庭園をパノラマで眺望するためのフレームとなっている。庭園は、この広間の土縁に添い横に長い平面形の園池を中心とした池泉回遊式で、園池の護岸には滝石組や洲浜の岬、夜泊石などが配され、泰阿弥が京都から運び据えた灯籠や手水鉢などの石造美術品が重要なアクセントになっている。また座敷前の巨大な鞍馬石の礼拝石や、阿賀野川上流から運ばれた名石も見どころである。

清水園に比べるとコンパクトな規模の中に、洗練された露地風の意匠や景石・灯籠などの良材が凝縮していて、全体として落ち着きを感じさせる空間になっている。そしてよく細部を凝視すると心憎い発見をさせる、楽しい庭園であった。

3所の庭園ではそれぞれの造形、規模、素材、土地や地形の利用、植栽などに驚きの連続で、贅沢な時間でした。当日お世話になりました新潟の皆様と事務局に感謝致します。

吹田直子（京都府教育庁文化財保護課）

編集後記

平成26年度に入り、新体制が発足した。ここ数年の、シンポジウムや研究会における新機軸の提示や、海外の組織との積極的な交流などが、どのように継承・発展されるのかを期待されている。

近年、夏期の自然災害による被害が全国各地で頻発している。公にされることは少ないが、昨年の台風18号の被害をはじめ、一部の地域では庭における被害が役所へも通報されている。われわれが知らないだけで、深刻な状況を招いている庭もあるに違いない。

学術的に庭に携わっていると、そのような自然災害による庭への被害などについては、どうしても疎くなっていくところがありはしないか。庭があることによって、またそれを保存管理して下さる方がいるからこそ、われわれの庭の研究が説得力を持ち、研究成果が次世代に引き継がれることができる。実態にたいして謙虚になることの重要性を、つくづく感じさせられる。

【会費納入のお願い】

学会費の納入額をご確認のうえ、納入のほどよろしくお願ひします。また、過年度滞納の方は併せて納入のほどよろしくお願ひします。

【協力者】

土沼直亮（新潟市旧齋藤家別邸）、熊倉早苗（植彌加藤造園株式会社）、吹田直子（京都府教育庁文化財保護課）、北森さやか、齋藤絢子（植彌加藤造園株式会社）

日本庭園学会広報委員会

今江秀史、加藤友規

〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山2-116

京都造形芸術大学日本庭園・歴史遺産研究センター一気付

日本庭園学会関西支部事務局 FAX(075)791-9342